資　料

小児看護学概論授業方法の研究

－「乳幼児期の発達段階に応じた世話」の単元にグループワークを導入した学習効果－

髙橋　明美[1)]　加藤象二郎[2)]　木村　紀子[1)]　髙山　充[1)]

要　旨

本研究は、小児と触れ合う機会の少ない看護学生に対し、小児の理解のため「乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護」という単元において、グループワーク学習および発表を行い、アンケートによる単元の授業評価を実施させた。

結果、単元への興味・関心、参加態度、内容の理解について質問10項目すべてにおいて、80%以上の学生から「大いにそう思う」「ややそう思う」と肯定的評価を得た。中でも「発達に応じた世話の必要性の理解」が97%と最も多かった。「グループワークへの積極的参加」「発表会への積極的参加」が次に多かった。更に質問10項目を多変量解析による主成分分析をすると、「グループワーク積極的参加」、「授業の意義・楽しみ」という２つの主成分が抽出でき、グループワークに積極的に参加し、授業に意義や楽しみを感じている群40%、グループワークに消極的参加で、授業に意義や楽しみを感じていない群29%の２群に分類できた。

グループワークを導入した単元学習は肯定的回答が多いことから、乳幼児の理解につながる学習の効果はあるといえる。しかし、消極的で、授業に意義や楽しみを感じていない学生の割合も無視できず、授業方法、進め方に課題が残った。

キーワード：乳幼児、成長発達、授業の意義・楽しみ、グループワーク

Ⅰ.緒言

少子化、核家族化の現代若者は、身近に乳幼児が少なく、また触れ合う機会も少ない。陳は「多くの人々は成長する過程において、大人が子育てをする場面を経験せずに大人になる。その結果、かなりの割合の大人が子どもに関する身体技術（抱き方や様々の世話の技術）、子育てに必要な態度及び子育てに関する知識を持たずに親になる。」[1)]と述べている。看護学生も同様の環境にあり、野村らの「赤ちゃんを抱く、子どもと遊ぶことは体験しても、世話をする体験は少ない」[2)]という研究結果からも、小児との接触体験が少ないと小児の理解が困難となり看護する上で支障をきたす。小児看護学領域は、小児の病気治療のみならず、年齢相応の世話や生活指導が重要となってくる。特に乳幼児は世話が必要であり、成長発達段階に応じた育児の情報、乳幼児や母親とのふれ合い等、学生が主体的に学ぶことが大切であり、こうした学びを通して市川らのいう「乳幼児のイメージを具体化させる」[3)]こととなる。

そこで、筆者は学生に「乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護」という単元において、グループワーク学習を導入し、担当項目について、基礎知識の確認、情報収集、育児グッズ探索、おむつの吸水性能試験、離乳食調理の実際、母親へのインタビュー等に関する学習計画と実施ができるよう示唆をし、乳幼児の理解につなげたいと考えた。先行研究では、上山が単元の授業評価としてグループワークの効果について、「グループワークを導入することで単元学習の理解が深まった。自らが検索し、主体的に学べる」[4)]「担当項目以外の項目にも関心は高まり、グループワーク導入の単元の肯定的評価は６割以上」[5)]という結果を発表している。

１）川崎市立看護短期大学
２）愛知みずほ大学

今回、看護学生にグループワークを導入した単元学習について、授業後のアンケート調査から分析したので、ここに報告する。

Ⅱ.研究目的

小児看護学概論の「乳幼児期の成長発達段階に応じた世話と健康増進のための看護」の単元において、グループワークを導入した学習方法の効果を検討し、課題を見出す。

Ⅲ.研究方法

1．研究デザイン

質問紙による実態調査研究

2．質問紙の構成（表1）

1）個人属性：性別、子育て経験の有無、子どもへの興味の有無

2）グループワークに関する単元への興味・関心、参加態度、内容の理解について10の評価項目（4件法：大いにそう思う～全く思わない）

3）グループワーク発表の興味と理解の2項目

4）自由記述項目（グループワークで学んだ事、発表会で学んだ事、その他）

表1　小児グループワークについてのアンケート

以下の質問に対し、該当する答えを○で囲んでください。

性別（　男　女　）　子育て経験の有無（　有り　なし　）

担当した項目を書いてください（　　）例）食事

授業前に子どもに興味・関心がありましたか？（　はい　いいえ　）

	大いにそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全く思わない
1．グループワークの単元（小児の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護）に関心がありましたか？	4	3	2	1
2．あなたの担当した項目に興味はありましたか？	4	3	2	1
3．グループワークは積極的に参加できましたか？	4	3	2	1
4．グループワークは楽しいと思いましたか？	4	3	2	1
5．発達段階に応じた世話の必要性は理解できましたか？	4	3	2	1
6．他のグループ発表に関心がありましたか？	4	3	2	1
7．発表会は積極的に参加できましたか？	4	3	2	1
8．発表会後、子どもへの興味・関心は高まりましたか？	4	3	2	1
9．この単元の授業方法は適切だと思いますか？	4	3	2	1
10．発表資料は今後活用できそうですか？	4	3	2	1

interest ある対象（事物や活動など）についての積極的な選択の構えを関心といい、それに好きという情動的な心的状態が加わったものを興味とよぶ

11. 発表で興味をもった項目を1つ挙げてください。（　　）

12. 発表でよく理解できた項目を1つ挙げてください。（　　）

13. グループワークで学んだこと

14. 発表会で学んだこと

15. その他（感想、意見、質問）

3．データ収集期間

平成23年6月

4．対象者

A短期大学2年生　79名

5．データ収集方法

小児看護学概論の「乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護」の単元終了後に、筆者の作成した質問紙を配布し、回答を得た。

6．データ分析

集計と分析はEXCELおよび統計ソフトSPSS（Ver11.5J）を用い、単純集計、X2検定、主成分分析を行った。

7．倫理的配慮

対象者に回答は任意であること、無記名とし、個人が特定されないこと、成績には関係ないことを口頭と紙面にて説明した。結果は次年度の授業に活用することと紀要もしくは学会発表する旨を伝え、了承を得た。また本学倫理審査委員会にて審議され、承諾を得た。

8．授業の進め方（表2）

「小児看護学概論」30時間（15回）のうち、8時間（4回）を「乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進への援助」という単元とし、グループワークを行った。内容は①食事②清潔・衣服③排泄④睡眠⑤遊び⑥旅行・事故防止の6項目で、6～7人の小グループに分け、1項目2グループ、合計12グループを編成した。それぞれ希望する項目を選んでもらい、重複した場合は、グループ間で話し合いによる決定をさせた。教員が進め方の示唆を与え、学生はグループで計画立案し、主体的に学習を進め、結果を資料にして発表させた。

表2　小児看護学概論の授業の進め方

回	内　　容	備考
1	オリエンテーション 小児と小児を取り巻く環境 ①小児とは②小児期の分類③子どもと家族・社会　④子どもと医療	
2	小児看護の変遷 ①小児観②小児医療と疾病③小児の入院環境 小児看護の対象と目標 小児看護の役割	
3	小児の保健統計 ①小児の人口推移②出生③小児の死亡③出生に関する今日的問題	講義とディスカッション
4	小児看護における倫理 ①子どもの権利　②医療現場で起こりやすい問題点と看護	講義とディスカッション
5・6	小児の成長と発達（1）（2） ①成長発達を学ぶ意義、成長・発達の原則と影響因子　②発達段階と発達課題、人格の形成　③形態的成長	
7・8	小児の成長と発達（3）（4）（5） ①　能的発達　②神経運動機能の発達　③心理社会的発達、性の発達　④発達評価と環境アセスメント	
9	乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護（1）	グループワーク
10	乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護（2）	グループワーク
11	乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護（3）	グループワーク
12	学童期・思春期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護	
13	乳幼児期の発達段階に応じた世話と健康増進のための看護（4）	グループワーク 発表　アンケート
14	母子保健の動向　①母子保健の目的と動向②母子保健③学校保健④予防接種⑤虐待⑥事故防止	
15	小児を取り巻く現代の問題と今後の課題、全体のまとめ	アンケート

Ⅳ.結果

1）調査票の回収結果

調査票は受講者75名から回収した（回収率94%）。内訳は女性72名、男性3名であった。グループワーク担当項目別の人数は表3に示したが、男性が3名と少なかったため、性別の内訳は集計対象外とした。グループワーク担当別学生人数に偏りがないか$\chi 2$検定の結果、有意差は無かった（$\chi^2 = 0.919$,df=5,ns）。

表3　グループワーク担当項目別学生数

	食事	清潔・衣服	睡眠	排泄	遊び	旅行・事故	計
人数	13	10	14	14	12	12	75
%	17.3	13.3	18.7	18.7	16.0	16.0	100

（1）子どもへの興味・関心の有無を聞いた結果、「はい（有）」と回答した学生は56名、「いいえ」と回答した学生は19名で、有意に「興味・関心あり」が多かった（χ^2=18.253,df=1,p<0.01）。

（2）興味を持ったグループワーク項目について聞いた結果（表4）、「食事」に興味を持った学生が33名と有意に最も多かった（χ^2=52.342,df=5,p<0.01）。

表4　発表で興味を持った項目別学生数

	食事	清潔・衣服	睡眠	排泄	遊び	旅行・事故	計
人数	33	7	3	3	12	15	73
%	44.0	9.3	4.0	4.0	16.0	20.0	97.3

（3）理解できたグループワーク項目では、「食事」と回答する学生が最も多く（表5）、χ^2検定の結果、有意差が認められた（$\chi 2$=23.500,df=5,p<0.01）。

表5　発表で理解できた項目別学生数

	食事	清潔・衣服	睡眠	排泄	遊び	旅行・事故	計
人数	27	10	10	10	6	9	72
%	36	13.3	13.3	13.3	8	12	96

（4）子育て経験の有無では、未経験者が72名、経験者は3名であったため、以降の統計的処理の対象外とした。

2）各質問項目の回答結果

アンケートの質問10項目についての回答をグラフにしたのが図1である。単元および担当項目への関心については、「単元への関心」84%、「担当項目の興味」83%の学生が、「大いにそう思う」「ややそう思う」という肯定的回答をしていた。グループワークの参加態度は、「グループワークへの積極的参加」91%、「グループワークの楽しさ」89%が肯定的回答であった。発表会への関心では、「他のグループ発表への関心」95%、「発表会の積極的参加」93%であり、単元の学習内容では、「発達段階に応じた世話の必要性が理解できた」97%と最も高い肯定的回答が得られた。さらに、「単元の授業方法の適切さ」89%、「発表資料の今後の活用」95%が肯定的回答であった。「単元への関心」「発表会後の子どもへの興味・関心」「担当項目への興味・関心」については、「あまり思わない」「まったく思わない」と回答した学生が20%前後で他の項目より否定的回答が多かった。全体としては、10項目すべて80%以上の肯定的回答が得られた（図1）。

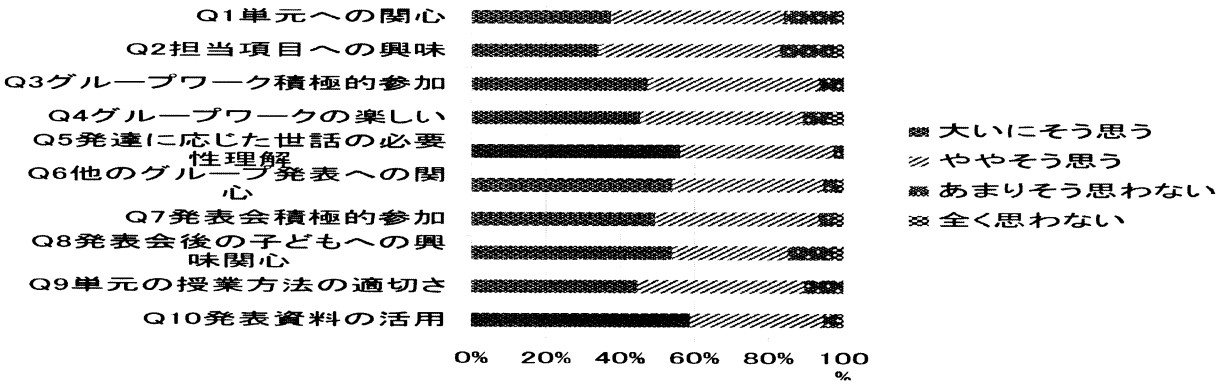

図1　グループワークについての質問項目の回答結果

3）主成分分析の結果

単元への興味・関心、参加態度、内容の理解について筆者の作成した10の質問項目に対し、主成分分析を行った。この多変量解析法は、10種の質問項目からなる尺度を少数の尺度に統合する目的で適用したものである。主成分分析で得られた初期解にプロマックス法（軸回転）を適用した結果、２つの主成分が抽出された（表６）。第１主成分は「グループワーク積極的参加」、第２主成分は「授業の意義・楽しみ」とそれぞれ命名した。

第１主成分では、「発達段階に応じた世話の必要性の理解」、「他のグループ発表への関心」、「発表会への積極的参加」、「発表資料の今後の活用」、「単元の授業方法の適切さ」、「発表会後の子どもへの興味・関心」の質問項目に高い負荷量を、第２主成分では、「担当項目の興味」、「単元への関心」、「グループワークの楽しさ」、「グループワークへの積極的参加」の質問項目に高い負荷量を有していた。

表６　グループワークについての質問項目の主成分負荷量

	第１主成分	第２主成分
Q5世話必要理解	0.898	−0.114
Q6他Gr発表関心	0.888	0.054
Q7発表積極参加	0.816	−0.325
Q10今後活用	0.673	0.134
Q9授業法適切	0.610	0.273
Q8子どもへ関心	0.474	0.255
Q2 担当項目興味	−0.207	0.900
Q1GW 単元	−0.063	0.763
Q4GW楽しい	0.077	0.672
Q3GW 積極参加	0.265	0.652
興味関心	0.025	0.09
興味項目	−0.086	0.008
理解項目	−0.006	−0.029

主成分負荷得点行列から回答者個人の第１および第２主成分得点を求め、直交座標にプロットした結果を図２に示した。第１、第２主成分共に得点がプラスの群（図中第１象限）は、グループワークに積極的に参加し、授業に意義や楽しみを感じている学生群であり、30名が該当した。逆に第１、第２主成分共に得点がマイナスの群（図中第３象限）は、グループワークに消極的に参加し、授業に意義や楽しみを感じていない学生群で、22名であった。

「第１象限学生群（グループワークに積極的参加し、授業に意義や楽しみを感じている群、以下グループワーク高群と表記）」と「第３象限学生群（グループワークに消極的参加し、授業に意義や楽しみを感じていない群、以下グループワーク低群と表記）」の各主成分得点を分散分析した結果、グループワーク高群の各質問項目の平均値は、グループワーク低群より有意に高いことが認められた（$F=285.12$, $df=1/50$, $p<0.01$）。グループワーク低群は各質問項目の平均値間に有意差が認められた（５％水準）が、反面、グループワーク高群には各質問項目の平均値間に有意差はなかった（図３）。グループワーク低群では、どの質問項目の平均値間に有意差があるのかをLSD法による５％水準での検定結果を表７に示した。

表７からグループワーク低群に特徴的なことは、「乳幼児期の発達段階に応じた世話（質問１）」への関心、「担当したグループワーク担当項目（質問２）」への関心、「グループワークの

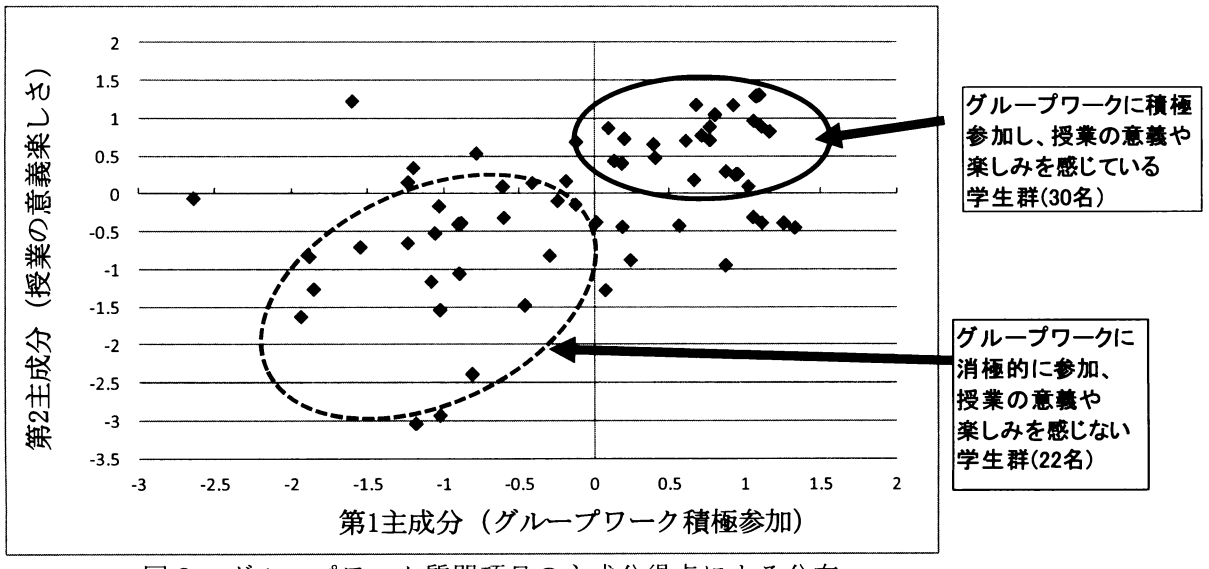

図２．グループワーク質問項目の主成分得点による分布

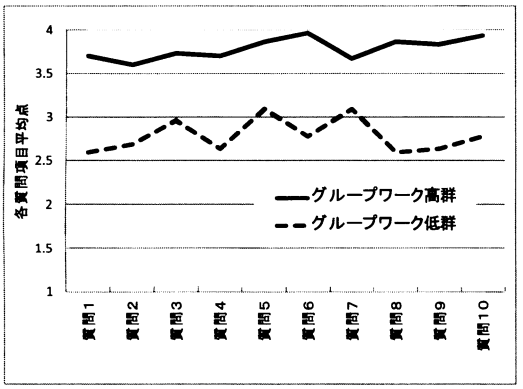

図３．グループワーク高低群別の各質問項目平均点

表7 第３象限学生（グループワーク低群）の質問項目平均値間の検定（LSD 法）

B1 ＜ B3 ＊	B4 ＜ B5 ＊
B1 ＜ B5 ＊	B4 ＜ B7 ＊
B1 ＜ B7 ＊	B5 ＞ B6 ＊
B2 ＜ B3 ＊	B5 ＞ B8 ＊
B2 ＜ B5 ＊	B5 ＞ B9 ＊
B2 ＜ B 7 ＊	B5 ＞ B10 ＊
B3 ＞ B4 ＊	B6 ＜ B7 ＊
B3 ＞ B8 ＊	B7 ＞ B8 ＊
B3 ＞ B9 ＊	B7 ＞ B9 ＊

注：B1～B10 は質問 1～10 に対応
＊印は5%水準で統計的有意差を意味

楽しさ（質問４）」、「他グループの発表に関心（質問６）」、「発表後に子どもへの興味・関心は高まったか（質問８）」、「この単元の授業法は適切か（質問９）」等の質問項目の平均点が低いことである。すなわちグループワークへの関心・興味が低いという特徴がみられた。

表８ グループワーク・発表会で学んだこと

グループワークで学んだこと	強調・協力	協力しあうことの大切さ	発表会で学んだこと	発表の仕方	分かりやすいプレゼンテーションのしかた
		意見交換の重要性			発表資料の作り方
		考えの違いを理解すること			見せ方の工夫、説明の工夫
		役割を果たすことの大切さ			発表の仕方のグループ差が面白かった
		主体性の重要性			視覚に訴える発表内容が良く分かった
		グループ内の人との関わりの難しさ			事例の具体例
		皆で調べることの楽しさ		成長発達、子育て	子どもの様々な面での成長発達が学べた
		皆の役に立つことの充実感			子どもの成長発達が速いこと
		一つのことをまとめるのが面倒くさい			様々な視点での子育ての理解が出来た
	研究的姿勢	手際よく行う手法が身についた			子育ての現在
		論理的思考、根拠の明確さ			乳児の特徴や気をつけることがわかった
		文献の活かし方			幼児について詳しく学べた
		皆で調べることで情報・知識が増えた			発達段階にあわせて色々な商品があること
	現状理解	店に行って商品を見ることで理解が深まった			子育てに関する用品の時代の変化の理解
		子ども用品がどんどん工夫されている		興味	乳幼児の食習慣
		母親からのアンケートで実態が理解できた			小児の事故
	その他	子どもの成長・発達が速いこと			
		子どもには発達に個人差があること			
		母親の苦労がわかった			

４）グループワーク・発表会で学んだことの自由記載の結果

グループワークで学んだこと、発表会で学んだことについて、自由記載の結果を表８に示した。

グループワークで学んだことでは、協調・協力の大切さが最も多く、１つのテーマを深く調べていく研究的姿勢が次に多かった。

発表会で学んだことでは、有効な発表の仕方について、他のグループの発表を聞き良く学んでいた。また、各項目の成長発達についても理解が深まったと答えていた。興味を持った項目で具体的にあがっていたのは「乳幼児の食習慣」と「小児の事故」であった。

V．考 察

1）グループワークを導入した単元の学習効果

上山は「グループワークによる発表形式は、学生が自ら検索し、グループダイナミックスを活用して項目をまとめるため主体的に学べる。」[6]と述べている。

今回筆者が行った単元学習での質問10項目の回答結果から、肯定的回答が最も多かったのは、「発達段階に応じた世話の必要性の理解」(97%）であった。次に多かったのは、グループワークへの関心・参加態度であり、さらに発表会への関心・参加態度も90%以上の肯定的回答であった。前述の上山の研究結果では、単元の違いはあるものの、単元への関心度が50%、グループワークへの参加度60%、グループワーク授業の楽しさ60%という結果と比べると、今回の調査対象学生は、グループワーク学習に関心を持ち、積極的に取り組んだといえる。単元が乳幼児の世話に関する項目であり、小児期を回顧したり、育児用の物品に触れたり、親へのインタビュー等と具体的で実際的な学びができたためと考えられる。

主成分分析の結果をみると、単元への興味・関心の程度は、グループワーク高群30名(40%)、グループワーク低群22名(29%)であり、グループワーク低群に位置する学生は、単元への興味・関心が低いという特徴がみられた。質問10項目の回答で、単元・担当項目への関心に関して、否定的回答が20%前後と他の質問項目より高かった。さらに発表会後の子どもへの興味関心についても15%が否定的回答をしていた。これらの学生は、主成分分析のグループワーク低群に位置していると考えられる。

上山は、「単元へのねらいを踏まえ、講義全体への関心を深めるための準備教育の導入が必要である。」[5]と述べていることから、グループワーク低群の学生に関心を高めてもらうためには、グループワークへの導入準備としての、単元までの授業の進め方、講義の内容が重要な要素になるといえる。自由記載にあった「まとめることが面倒くさい」「グループ内の人との関わりの難しさ」の回答にあることから、一つのことを粘り強く追求する探究心を養うための授業の構築や、グループワークに慣れない学生に対し、グループダイナミックスを味わう機会を提供するなどの工夫が必要であろう。さらに、茂木らは「フィールド観察は有効であり、その学習成果を活用し、子どもの行動と成長発達に関する概念を関連付け、学習を深める必要性がある」[7]と述べており、今回の単元学習では、親へのインタビューやデパートでの育児・子ども用品の観察を取り入れたグループも多く、それらの発表から、単元のまとめとして概念化に導く教授法も重要であることが示唆された。

2）単元の改善視点

「小児看護学」のグループワーク学習のアンケート調査結果に主成分分析を適用した結果、学生のグループワークへの興味・関心の程度は、グループワーク高・低群の2群に分類しえる可能性が示唆された。授業科目への興味・関心に寄与する要因は種々あるが、端的な分類法は単元のねらいである「乳幼児期の成長発達段階に応じた世話と看護への興味・関心（質問1）」と考えられる。この単元への興味・関心の低い学生に影響している要因は何かを追及していくことが必要と考える。これへの手かがりの1つは「この単元の授業法は適切と思うか(質問9)」にあると考えられる。どのような授業法を採用することが学生の理解・満足を、ひいては興味・関心を誘発できるのか、について継続的な研究が必要である。

3）学生の興味・関心としての「食事」

表2、表3での集計結果から、学生自ら選択したグループワーク項目と関係なく、「食事」に興味を持ったと回答する学生が44%、「食事」について理解できたと回答した学生が36%と、最も多かった。これは、発表での資料や発表方法が優れていたこともあるが、乳児の離乳までの食事内容、形態の変化、幼児の食事動作の発達の速さなど、小児の世話を身近で見ていない学生には、衝撃的であったと考えられる。表7の発表会で学んだこと（自由記述）の中に「視覚に訴える」、「乳幼児の食習慣」の意見が記載されていたことからも、特に食事を担当したグループは、離乳食の試食や食事道具の紹介、栄養素の重要性を強調していたことに皆の関心を集めたといえる。

Ⅵ．結論

1．単元および担当項目への関心、グループワークの参加態度、発表会への関心、単元の学習内容の質問項目はすべて80％以上の肯定的回答を得た。

2．単元の学習内容「発達に応じた世話の必要性が理解できた」は、97％の学生から肯定的回答得た。

3．単元への興味・関心、グループワークの参加態度、内容の理解について主成分分析を行った結果２つの主成分が抽出でき、グループワークに積極的参加し、授業に意義や楽しみを感じている群（40％）、グループワークに消極的参加し、授業に意義や楽しみを感じていない群（29％）の２群に分類できた。

4．グループワークに積極的に参加し、授業に意義や楽しみを感じている群、とグループワークに消極的参加し、授業に意義や楽しみを感じていない群の各主成分得点を分散分析した結果、前者の各質問項目の平均値は、後者より有意に高いことが認められた。

5．興味や理解した内容は、学生自ら選択したグループワーク項目と関係なく「食事」と回答する学生が最も多かった。

6．グループワークで学んだことでは、強調・協力の大切さが最も多く、発表会で学んだことでは、有効な発表の仕方が最も多かった。

以上から、グループワーク導入により、単元の学習内容の理解につながった。また、グループワークでの協力･強調の大切さも学んでおり、グループワークを導入した学習効果は高かった。しかし、グループワークに消極的な学生の割合も無視することはできない。今後の課題として、グループワークへの導入準備として、単元までの授業の進め方、グループワーク発表後の概念化等の講義内容の吟味が必要である。学生の興味・関心を誘発する授業方法について継続的に取り組み、学習効果をさらに焦点化して研究を進めていきたい。

謝辞

今回の研究に際し、協力くださった学生の皆様に感謝いたします。

引用文献

1）陳省仁．子ども発達臨床研究．創刊号．2007，p.19-26.

2）野村幸子他．子どもの接触体験からみた看護学生の子どもイメージ．県立広島大学保健福祉学部誌．Vol.7，no.1，2007，p.169-180.

3）市川正人他．看護系大学生のもつ乳幼児に対するイメージの変化（第１報）－小児看護学領域学習前後の比較による学習効果の検討－．名寄市立大学紀要．Vol.5，2011，p.21-26.

4）上山和子．小児看護学の教育方法に関する研究（１）－授業方法にグループワークを導入した効果と教育上の課題－．新見公立短期大学紀要．no.23，2002，p.123-131.

5）上山和子．小児看護学の教育方法に関する研究（第３報）－社会資源の単元における学生の関心を高める授業展開－．新見公立短期大学紀要．no.29，2008，p.33-37.

6）上山和子．小児看護学の教育方法に関する研究（第２報）－社会資源の単元の授業評価－．新見公立短期大学紀要．Vol.26，2005，p.71-80.

7）茂木咲子他．子どもと子どもを取り巻く社会の観察における学生の学習成果．岐阜県立看護大学紀要．Vol.5，no.1，2005，p.59-62.